ブラコンな妹

八乙女モンキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラコンな妹

【Ｎコード】
Ｎ６１０３Ｔ

【作者名】
八乙女モンキー

【あらすじ】
ある兄妹による『聖なる日の正しい過ごし方』の正反対なお話です。

実在する妹に対してこういう事をするのはダメです。実在する兄にこういう事を求めてはきっとダメです……ダメですか？

はい、のほほんとした兄妹のお話です。少しでも和んで頂けたらうれしいです。

誰が今日という日を『特別な日』として確立させてしまったのか……。俺は微妙にそいつが憎い。いや、実際はかなりだが。原因を作った奴は確か歴史の教科書で太陽を手に抱いてる奴だったっけ？

今日は独り身には一番辛く、悲しい日。俺にとっては望んでもいない日である。前フリが長いな。『クリスマス・イヴ』その当日だ。親友は彼女とデートだとか抜かしやがったりしました。ええ、それはもう嬉しそうな声で伝えてきやがって、俺はそんなこと聞きたくもないってのに！　数時間後にはホテルで火照ることでもしてることだろうさっ！！　余りにもムカついたんで駄洒落なんかを言ってしまった。あくまで心の中でだけど。

「も、もうあんな奴は親友なんかじゃないんだからね！」

以前ニュースで言ってた『ツンテン』とかなんとかいうのを真似てみたが、余計に虚しさが重みを増した。虚しさに質量があるなんて初めてしったよ。てか、アイツに彼女が出来たこと自体がおかしいんだよ。これはなんだ、夢の中の出来事なんじゃないのか？　ソレとも、誰かが作ったゲームの中なんじゃないのか？　現実逃避にそんなくだらないことを考えてしまい、溜息が出た。このままじゃ不毛過ぎて泣けてくる。

気分を変える為に、一階でゲームでもやって気を紛らわせようと考えた午後五時半。ちなみに俺の部屋は二階で、部屋にはテレビがないという現代では稀なんじゃないかと思う。でも、買って貰えないので仕方ない。え、バイトして自分で買えって？　遊びとかゲームに使っちまって無理無理。リビングに入ると妹がテレビを観てい

た。妹の名前は香澄（かすみ）。顔は両親譲りで身内贔屓な意見をなしにしてもそこそこイケている。だが、見事に俺と同じで恋人いない暦が年齢と同じ。なんとも悲しい女だ。え、俺は悲しくないのかって？

ＨＡＨＡＨＡ……い、いいんだよ。人生顔がよくないと性格良くてもダメなんだよ。あと、押しが強いかどうかも問題で。更に言えば金を持ってないと論外だし。あ〝ぁ〜！　余計にブルー入ってしまった。さて、妹の紹介に戻ろうかね。

二歳下で今年高校生デビューした現役女子高生だ。髪は背中に届きそうなくらい長く、外では首の後ろ辺りで一本の三つ編みにしているか、ストレートのまま。家の中ではポニーテールかストレートにしている。風呂に入るまでは基本ポニテだ。活発という訳でもないが、サラサラとその尻尾が揺れる姿は妹だというのに可愛い魅力がある。で、香澄の特徴なんだけど……兄の俺が言うのもなんだけど、ちょっとブラコン気味。自惚れでもなければ、彼女居ない暦が長すぎて自分に都合のいい妄想癖が付加しているとかではないぞ？

「よぅ。香澄は友達とパーティとかないのか？」

「あ、兄ちゃん。そんなの断ったに決まってるじゃない。今日は特別な夜。イヴなんだから」

その言葉に俺はピンときた。妹の恋愛事情なんて興味なかったので、てっきりまだ恋人がいないのかと思っていたが、この様子なら今日は彼氏とデートということらしい。妹にすら先に越された結果になったが、ブラコン気味だったのも卒業と言うことを意味している訳で、純粋に喜ぶことにしよう。……長男としてはちょっと、悲しいが。

「彼氏とデートか？　羨ましいな」

「何言ってるの？　わたしが兄ちゃん以外の人を彼氏にする訳ないじゃん」
「……いや、普通は兄を彼氏にする妹はいないから」
「ここにいる！」

香澄がキッパリと言い切った。それはもう自信満々に小さくてまだまだこれから育つであろう希望を秘めた胸を張って。母さんが小さいから遺伝の力を拒絶しない限り望みは薄いが。希望を摘むようなことを指摘するほど俺は鬼畜じゃない。

「あのな、香澄。そろそろブラコンから卒業しようぜ。もう香澄は結婚できる歳になったんだし」

香澄の誕生日は先月だったので、十六歳なのだ。俺は七月生まれなのでお互いに結婚できる歳になっていた。先ほど言った通り、結婚相手どころか恋人がいない兄妹だが。深く考えるのは止そう。

「ブラコンを卒業？　それは兄ちゃんがわたしの身体に飽きたということ！？」
「いや、そんな大声でご近所さんに聞こえたらかなり危ない誤解をされるようなこと言うな！」

俺の言葉に口の端を上げてスマイルを浮かべる。どうやら確信犯のようだ。むしろ、誤解カモーンという感じだな。ブラコンここに極まれだ。

「冗談はともかく、兄ちゃんがいないとわたし何も出来ないから。むしろしない。死ぬね。だから、兄ちゃんはわたしと一緒に死んで」
「死なねーよ！　てか、俺がいなくてもやってけるだろ」

自慢じゃないがうちの妹は料理が得意だし、洗濯好きで、掃除もこまめにやっている。つまり、家事はなんでもこなせる良妻間違いなしの娘っ子なのだ。将来家政婦になって、家の中をかき回す《あの人》のようにだってなれるだろう。問題は、このブラコン気味な性格とソレに伴う発言を許せるかどうか。いや、俺が嫁に出せるように矯正しなきゃいけないんだけどな。日々苦労してるのだけど、全く直らない。暖簾に腕押しという状態だ。

「兄ちゃんがいないでやっていける？　冗談じゃない。絶対無理！　兄ちゃんはわたしの生きる意味だから。英語で言うなら兄ちゃんジュテーム」
「それ英語じゃないし。しかも、兄に対して使う言葉じゃねぇ！」
「それなら……兄ちゃん！　アイラブユー！！」
「う〝お〝っ！」

先ほどよりも大きい香澄の声がご近所中に響く渡った……可能性が大。いやいや、今頃みんな特別な日だから外食中さ。食事を終えてから家でパーティとかの可能性が高い筈だ。うん、そうに決まってる。そう信じないとやってられない。

「香澄。大声で愛を叫ぶのやめなさい」
「じゃあ世界の中心で愛を」
「流行はとっくの昔に過ぎたから」
「愛がダメならば……世界の果てで今度は恋でも歌う？」

そのネタがなんなのか解らないのでスルーした。知ってはいけない世界もあるだろうし。

「つまり、兄ちゃんはユノのように血縁同士のエッチがしたいってことか」

「血縁同士のえっ……って！　何を言い出すんだ！」
「だから近親相k」
「黙れっての！！　女の子がそんなこというな。つか、妹の口からそんな単語は聞きたくない。いや、マヂで」
「日本らしくランデブーと言い換えましょう」

日本語ですらないし、訳しても意味が違うが……つっこむ気力がなかった。こんな変わった妹を恋人にしてくれる男は現れるのだろうか？　答えは否だ。俺は香澄を矯正出来るのだろうか？　その答えも否だと思う、今日この頃。

「兄ちゃん。とりあえず、エッチは夜に残すとして。先にパーティーしよう。そんで、合コンの必須イベントである王様ゲーム！」
「やらん。色んな意味で全部やらん」
「大丈夫。そう言うと思って全部用意したから。割り箸の先っぽが赤い人が王様ね」
「俺の話を聞け！　二人で王様ゲームなんてやる兄妹がどこにいるかっての！」

香澄はキョトンとしたあどけない表情を浮かべた後、俺と自分を交互に指差した。律儀に三度も、だ。呆れ顔で深い溜息を吐く俺に対し、香澄はそれはもう嬉しさを体現するような満面の笑み。溜息が止まらない俺を他所に、割り箸二本を握った左手を差し出してくる。拒否は許さない強さを秘めた瞳で。

「兄ちゃん早く引いて」
「引かないっての」
「一回でいいから。ほら、今日はクリスマスなんだし。未来の為の思い出ってことで」
「……はぁ～」

安売りの溜め息を吐きながら覚悟を決める。二人しかいない訳だし、二分の一で王様になるのだから赤くなった割り箸を引き当てさえすればソレで終われるんだ。一度だけなら付き合ってもいいか。俺から見て左の割り箸を引いた。……大変残念なことにハズレを引き当ててしまった。無念。香澄がにんまりと笑った。残った割り箸を握りながら、その手を震わせて喜んでいやがる。

「じゃあ、『奴隷の人』が妹にキスをする。勿論愛の囁き付きで。大人なキスじゃないとヤだ」

「断固拒否！」

「……兄ちゃんはわたしが嫌いなんだ。香澄なんて生まれてこなければ良かったって思ってたんだ。ごめんね、生まれてきちゃってごめんね。兄ちゃんの妹でごめんね。聞き分けの悪い妹でごめんね。血が繋がっててごめんね」

浮かんでいた笑顔が引っ込み、ムンク氏も吃驚な絶望状態の顔になり、ボソボソと呪いの言葉を吐くように喋る香澄。俺はこれを香澄の必殺技？『呪いのワルツ』と名づけている。こうなった香澄を放置すると最低一週間ダウナーオーラを発散し続けるという恐ろしい未来が待っている。最低というから察していただけるだろう。放置の回数を重ねる毎にダウナーの日が増えている傾向にあり、去年なんて一ヶ月間もダウナー状態だった上に、最後には栄養失調で一週間入院したという恐怖の過去を持っているのだ。前回がソレなので、今回放置したらどんな事態になるか考えただけでも震えがくる。香澄のことが本当に大事なら、ここは躊躇してないでキスしてやる以外ない。初めてだとかそういうのは気にするな。身内はカウントしないのが常識だ。

「わ……わかた。あい、わかった。だけどただのキスだからな？

大人のキスは流石になしだぞ」
「……兄ちゃん」

絶望顔が一転して頬を赤らめ、乙女のソレに変わる香澄。こいつは将来演劇の道を進める可能性も出てきたな。カメレオン女優として名を馳せるかもしれない。シンデレラのハリウッド版とか似合いそうだ。なんでハリウッドなのかは不明だが。

「や、優しくしてね……。わたし、初めてだから」
「だーかーらっ！　誤解されるようなこと言うなっての。そもそもお前とのキスなら散々してきただろうが」

香澄が中学上がる頃までせっつかれるようにキスをしていた。流石にそれ以降はしていないけど。身内をカウントするのが普通だったら、俺は百は超えている経験豊富な男に早変わりだ。虚しさが増してばかりだ、マジで泣けてくる。キスしなくなった理由は照れ臭いのと、一般常識からかけ離れてるからいい加減にしろっていうのが主だ。いくら妹とはいえ、女としての可愛らしさが出てきた相手にキスをするのは本当に照れるんだって。変態とかシスコンって訳じゃなくて。

「そんな照れる事実を言わないでよ。とにかく……優しく、激しく。でも最後の一線はわたしのベッドの上で……ね？」
「最後も何もねぇよ！」
「……」

俺の言葉はスルーされ、香澄は目を瞑った。わざとらしく大きい溜め息を吐いてから、中学の時より五センチも伸びて高くなった香澄の肩に両手を乗せた。そのまま妹の小さくて……何気にラメ入りの口紅が塗ってある唇に自分の唇を重ねた。唇が触れた瞬間、妹の

身体がビクッと震える。なんだかんだ言っても、まだまだ子どもなんだなー。と、少し安心した俺。だが、それは甘い勘違いであった。香澄がそんな可愛いだけの妹ではないのはＤＮＡレベルで知ってた筈なのに。

触れてから直ぐに唇を離した俺の後頭部に手を回され、そのまま再び妹の唇に押し付けられた。突然の事態に驚きの声を上げようとした俺。それがいけなかった。開いた口は香澄にとって格好の獲物だった。狙っていたかの様に香澄の舌が口内に侵入してきた。

「〜〜〜っ！？」

言葉にならない声が重ねられている口から漏れるが、香澄は関係なしで俺の歯を舐める。恥ずかしいとか以前に、倫理的に間違えまくってる！　そう思って力ずくで離そうと思うのだが、香澄の舌がくすぐったくて、身体に力が入らない。……決して、気持ちいいから止めたくなりという願望で力を入れない訳じゃない。ふと、閉じられていた香澄の両の瞳が開いた。俺のことを熱っぽく見つめ、俺もそんな香澄を見つめていた。潤んだ瞳は綺麗で、小刻みに揺れ動き、今にも泣き出しそうだった。

だが、その反面口内での行為は過激で、歯や歯茎を舐めるのに満足したのか、今度は逃げる俺の舌を舐めてきた。逃げ惑う中、感じたことのない快楽への恐怖心から、無意識に唾を飲んでいた。香澄の唾液が十二分に混ざっているというのに。しかも、汚いと思えなかった。それどころか、ソレは俺の脳を溶かす媚薬のような効果があった。

俺の舌と自分の舌を絡めたいとばかりに誘ってくる香澄に、俺は自らの舌を絡めていく。その瞬間、香澄の瞳が驚きに見開かれ、涙が零れていた。慰めるように、俺は香澄の舌を強く吸い。肩に乗せていた手を背中に回し抱きしめる。相手が血の繋がった妹なんてこ

とも、今日がクリスマスなんてことも忘れ、ただただ唇と舌の熱い温もりを求めた……。

「で、だ……。妹よ」
「なに？」
「お前の落とした割り箸に『赤い印』がなかったことについてだな、兄ちゃんは小一時間は問い詰めたいんだが」

キスを終えたのは二分位前。どれだけキスをしてたのかは分からないが、長かったような気がする。時間感覚が麻痺してたから本当のところは分からない。今の問題はそこじゃない。二人の混じった唾液が床に垂れまくったのでそれをまず拭こうと屈んだ俺の目に飛び込んできたのは、妹が握っていたもう一本の割り箸。俺のと同様で無印だった。つまり香澄は王様ゲームの王様ではなかったのだ。

「……心理トリックに嵌った兄ちゃんが悪いんだよ。誰もあの二本のどちらかに赤い印があるなんて言ってないもの。兄ちゃんのことを奴隷とは言った。でも、同時にわたしが王様なんてことは一度も言ってない。だって、わたしも奴隷だったから。嘘だと思うならバックログで確認してみて」

こんの妹が……そんな屁理屈がまかり通るとでも思っているのか！　人がどんだけ恥ずかしい思いで妹とフレンチキスをしたと思ってたんだ！！　つーか、バックログってなんだよ！　仮面を被った

ナルシーな優男のことか！　イズナドロップするぞ！

「でも、勘違いさせるような原因を作ったのはわたし」

香澄は息を強く吸うと、

「今度は……兄ちゃんが奴隷のわたしに罰を与えて！！！！」

本日一番の大きな声で誤解しか招かない言葉を発した。

「ダァーーーッ！　だから誤解を招くような発言だけを大声で叫ぶように言うのはやめれー！　この馬鹿妹が！」

「兄ちゃんはツンデレ♪」

「ちげぇぇぇっての！！」

こうして、俺と妹のクリスマス・イヴは深けていく……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6103t/

ブラコンな妹

2011年6月3日17時11分発行